塩ノ久保遺跡

――一般県道磯部停車場線緊急地方道路整備A
(改良)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書――

1991

群馬県安中市教育委員会

塩ノ久保遺跡

――一般県道磯部停車場線緊急地方道路整備A
(改良)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書――

1991

群馬県安中市教育委員会

序

安中市磯部地区は碓氷川の南に東西に細長く存在する平坦な低地にあたります。この地区は穀倉地帯であり、工業地帯であるとともに、磯部温泉があり、観光地域でもあります。今回の発掘調査の実施は、この磯部温泉にある鉱泉橋を新しく架け替え、新鉱泉橋を建設するのに伴うものです。

磯部の地名は古く古代にまで遡るもので、物部氏の一族がこの地域を治めていたことが推定されています。今回の発掘調査によって古墳が発見されました。この古墳に葬られていたのは古代の磯部を治めていた豪族に関係するものであり、この地域の古代史を解明する上で重要であると思います。

なお、発掘調査にご協力いただきました地元の皆さまや、安中市の文化財保護の一端を担い、調査に従事していただいた方々には、この場を借りて厚くお礼を申し上げたいと存じます。

平成３年３月

安中市教育委員会

教育長　佐　藤　三木岩

例　　言

1　本書は一般県道磯部停車場線緊急地方道路整備Ａ（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　今回発掘調査を実施した塩（しお）ノ久保（くぼ）遺跡は、安中市西上磯部字塩ノ久保1142・1143・1157－１番地に存在する。また、塩ノ久保遺跡の略称は、Ｆ－５である。

3　発掘調査及び遺物整理は、群馬県からの委託金により、安中市教育委員会が実施した。

4　試掘調査は昭和62年度に実施し、発掘調査及び遺物整理は平成２年度に実施した。

5　調査は安中市教育委員会社会教育課主事大工原豊が担当し、主査松本豊が主として現場庶務を行った。

6　調査組織は次のとおりである。

安中市教育委員会事務局

教育部長	上原　満雄	主　査	松本　豊
社会教育課長	中島　茂弥	同	山中けい子
文化財係長	森泉寿義雄	主　事	大工原　豊（担当）
		同	千田　茂雄
		同	小黒　勝明

7　本書の編集は大工原が行い、本文の執筆のＶ－１(2)、Ⅵは加部二生（前橋市役所）が行い、その他については大工原が行った。

8　遺構・遺物の写真撮影は大工原が行い、航空写真は（有）青高館に委託して行った。

9　遺構図の作成・トレースは新井幸介、岡島美智子、鈴木茂美が行い、図版・写真図版の作成は白石俊子が行った。

10　今回の調査における記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。

11　発掘調査及び遺物整理の期間中次の方々にご指導、ご協力いただいた。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

志村　哲　　井上工業株式会社

12　発掘調査及び遺物整理従事者は次のとおりである。

秋山　広吉	新井　幸介	岡島美智子	小野　始	小野　泰野	清水　正	
白石　俊子	鈴木　茂美	須藤　ダイ	多胡　静	多胡　操	高橋さと子	
田島　元治	田島かつ子	田中　利策	古立　京	松本　恭子	丸岡　民子	
宮口　卓司	山田きの江	山村ヨネ子	湯川　光子			

凡　　例

1　遺構実測図は１／80、遺物実測図及び拓本は１／４である。

2　遺構実測図中のスクリーントーンは地山の礫が露出している部分を示している。また、等高線は10cm間隔である。

3　土層説明の中での記号、略称は次のとおりである。

色　　調	＜：より明るい方を示す（例　１＜２：１より２の方が明るい）
しまり・粘性	◎：あり、○：ややあり、△あまりない、×：なし
混　入　物	◎：大量、○：多量、△：少量、※：若干、×：なし
	ＲＰ：ローム粒子、ＲＢ：ロームブロック

4　遺物実測図中の拓本は断面の右が内側、左が外側を示す。

本　文　目　次

序

例　言

凡　例

目　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　調査の方法と経過 …… 1

Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 2

Ⅳ　層　　序 …… 6

Ⅴ　遺構と遺物 …… 6

1　古墳時代の遺構と遺物 …… 6

(1)　古墳 …… 6

(2)　遺物 …… 9

Ⅵ　成果と問題点 …… 14

1　磯部古墳群について …… 14

2　塩ノ久保Ｋ－１号墳の年代観 …… 14

(1)　半円形透かし孔について …… 14

(2)　上野国における５～６世紀前半の円筒埴輪 …… 20

挿図目次

第１図　塩ノ久保遺跡と周辺関連遺跡 …… 3
第２図　遺跡位置図 …… 4
第３図　調査区位置図 …… 5
第４図　Ｋ－１号墳実測図 ……折込
第５図　Ｋ－１号墳出土遺物実測図（１）……11
第６図　Ｋ－１号墳出土遺物実測図（２）……12
第７図　Ｋ－１号墳出土遺物実測図（３）……13
第８図　磯部地区の古墳 …… 15

表目次

第１表　Ｋ－１号墳遺物観察表 …… 10
第２表　関東における半円形透かし孔(1) …… 17
第３表　関東における半円形透かし孔(2) …… 18
第４表　群馬県内のＦＡ前後の円筒埴輪 …… 21

図版目次

図版－１　塩ノ久保遺跡遠景、調査区全景
図版－２　Ｋ－１号墳全景、周溝南側部分(1)(2)、周溝土層断面
　　集石を有する土壙
図版－３　Ｋ－１号墳出土遺物

I　調査に至る経過

昭和62年９月、群馬県安中土木事務所から県道磯部停車場線建設に係る照会があった。計画は橋梁を新たに架設し、それに接続する道路を新設するものであった。この内、道路建設部分については、碓氷川の両岸に埋蔵文化財が存在する可能性があったため、安中土木事務所と安中市教育委員会の間で協議を行った。その結果、道路建設予定部分を試掘調査し、埋蔵文化財の有無及びその規模等を把握することになった。

試掘調査は、昭和62年10月26日から10月29日までの間実施した。そして、碓氷川左岸の郷原字下毛山地内の道路建設予定地部分には埋蔵文化財は存在しないことが判明したが、西上磯部字塩ノ久保地内では、これまで知られていなかった古墳の存在することが明かとなった。

そこで、試掘調査の結果を受けて、土木事務所と市教育委員会の間で協議を行い、本調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。

II　調査の方法と経過

発掘調査は、まず最初にバックホーにより工事用の盛土と旧表土を掘削し、その後作業員により遺構確認作業を行った。なお、調査区中央に大きな段差があったため、便宜上南北に分割し、南調査区と北調査区に分け、各調査区毎に作業を行った。発掘の本調査は、平成２年10月１日から11月１日までの間実施した。

遺構が検出された部分については、さらに精査を行った。試掘調査の結果、古墳の墳丘部分はすでに削平されていることが確認されていたので、周溝部分を４分割し、各区毎に遺物を取り上げた。また、北調査区の南側では涌水があったため、排水作業を行いながらの遺構精査となった。

また、南調査区では当初古墳の存在が推定されたが、調査の過程で河川流路の蛇行と、自然堤防によって礫が集積されたように見えたことが判明した。

なお、遺構精査の後は、測量用の基準杭を設置し、調査区全体の平面図を作成した。また、検出された古墳については、平面図と土層断面図・等高線図を作成した。そして、調査の過程で記録用の写真撮影を実施した。

Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境

塩ノ久保遺跡は安中市西上磯部字塩ノ久保1142－１・1143・1157－１番地に所在する。本遺跡は碓氷川の右岸の河岸段丘上に位置する。この段丘は碓氷川下位段丘にあたる。また、この遺跡は磯部鉱泉の東に隣接した場所である。碓氷川はこの磯部鉱泉付近で大きく蛇行し、両岸に崖線を形成する。以前から鉱泉が涌き出している場所は、現在の鉱泉橋の南側の窪んだ部分であり、本遺跡の西約400ｍの地点にあたる。

細かく遺跡付近の地形をみると、段丘はさらに３段に区別され、本遺跡は下から２段目の段丘面に相当する。なお、調査区の中でもさらに細かい段丘崖が存在しており、Ｋ－１号墳は北側の低い段丘面に存在する。そして、この段丘面は北東方向へ緩やかに傾斜している。

次に、本遺跡と同じ古墳時代の遺跡で、周辺に存在する遺跡を概観する。

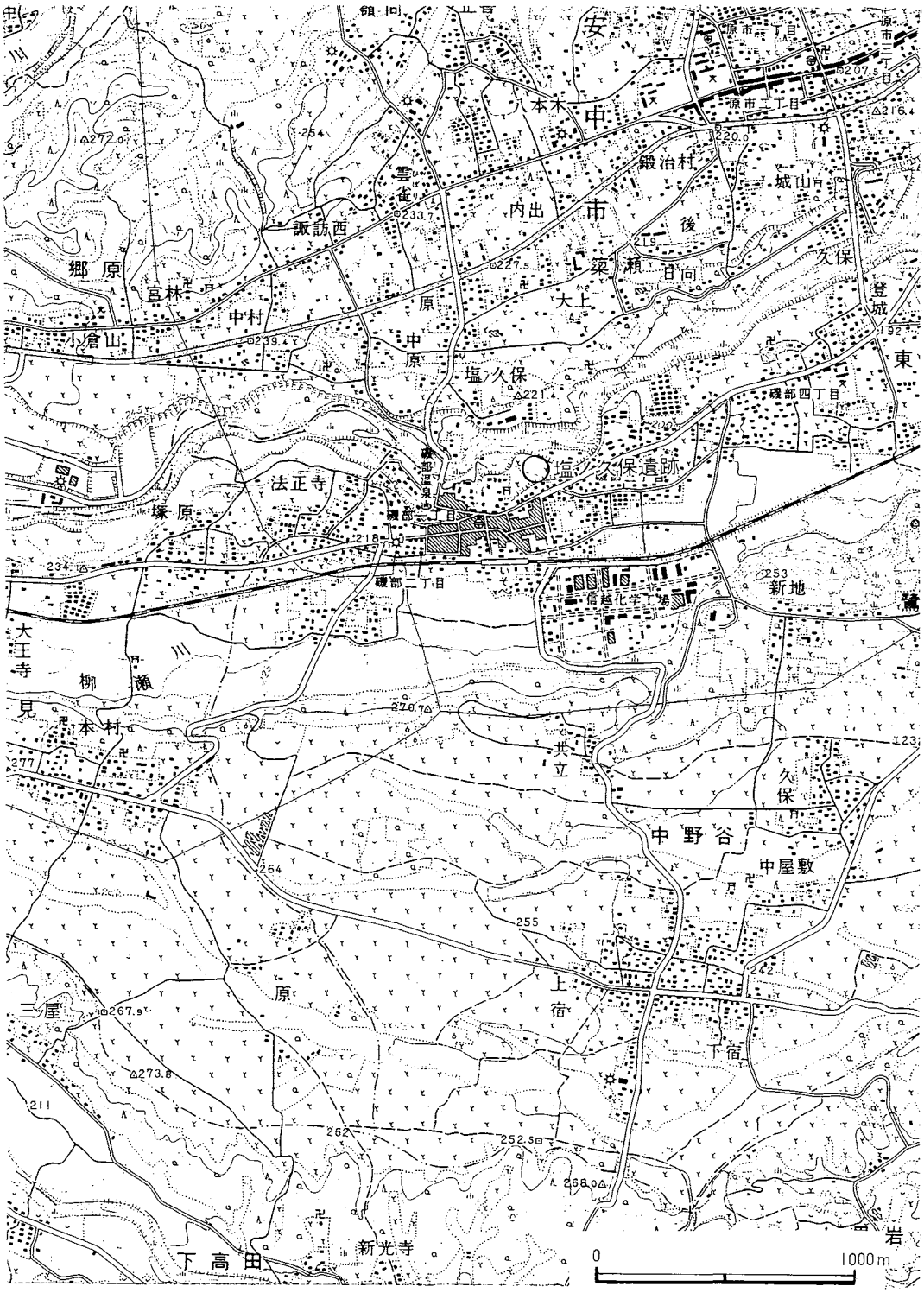
本遺跡Ｋ－１号墳（１）は磯部古墳群（２）の一つで、古墳群の西部にあたる。この古墳群については第Ⅵ章において詳述する。本遺跡の南南西約700ｍの地点にある田中田・久保田遺跡（３）では、５世紀段階の方形周溝墓が検出されている。また、西南西約１㎞の位置には西裏・西新井遺跡（４）、諏訪辺遺跡（５）があり、６世紀～９世紀にかけての集落址の存在が確認されている。また、さらに西方には、弥生時代から平安時代にかけての集落址である大王寺工業団地遺跡（６）が存在する。

碓氷川上位段丘にあたる中野谷丘陵では、段丘縁辺に長谷津向山古墳及び旧磯部町２号墳（７）が存在する。このうち、長谷津向山古墳はすでに削平されているが、竪穴式石室を有するものが２基存在していたことが判明している。また、さらに南方の台地上には５世紀中葉と８世紀の住居址が検出された天神原遺跡（９）、６世紀～７世紀の集落遺跡である北東・堤下遺跡（11）や、加賀塚古墳（８）、中野谷古墳群（10）、旧磯部町１号墳（13）などが存在する。

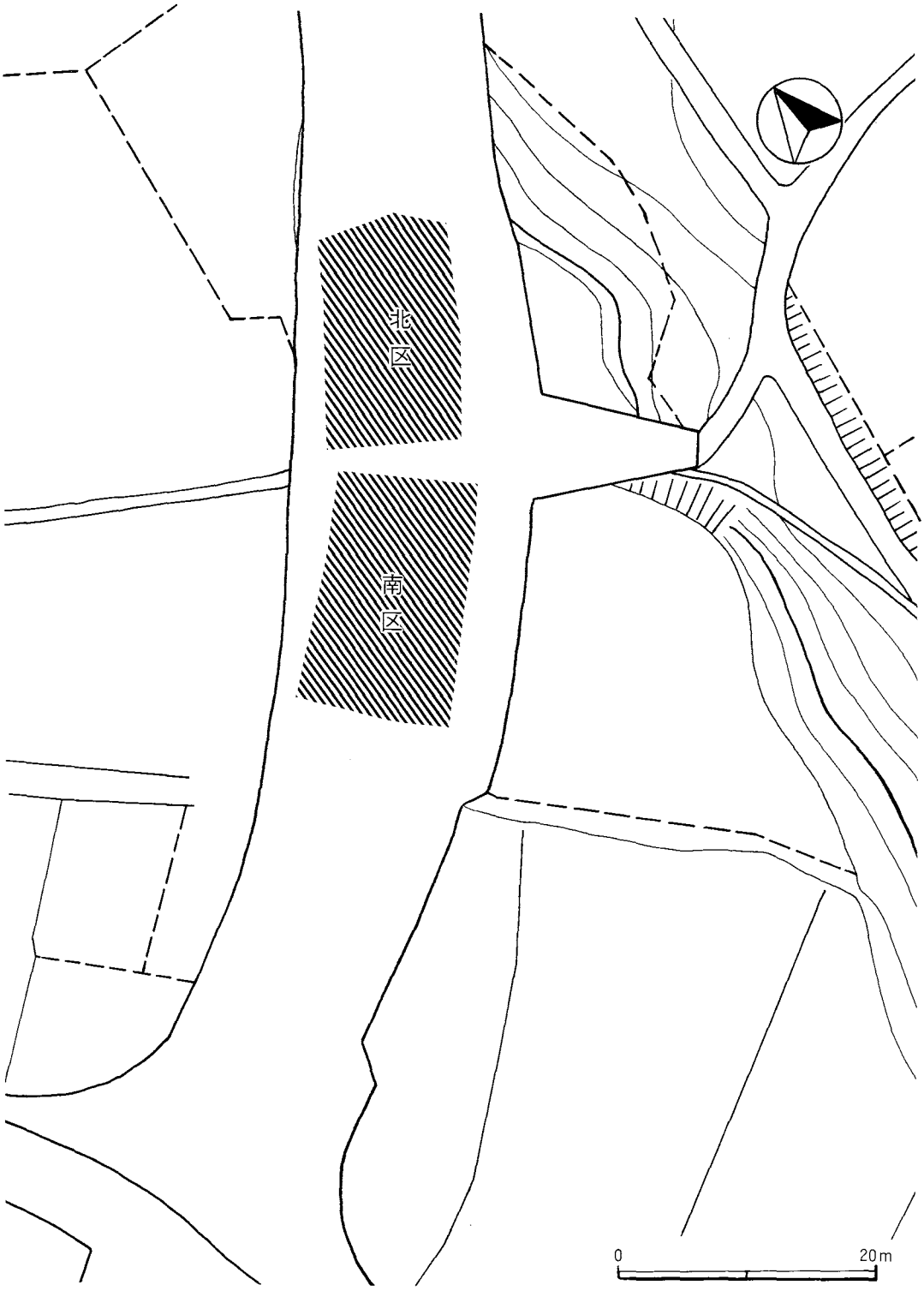
一方、碓氷川の北岸では、本遺跡の対岸に横穴式石室を有する東下毛山古墳（15）が存在する。また、上流約2.5㎞には郷原古墳群（14）が存在し、下流域には簗瀬首塚古墳（16）、簗瀬二子塚古墳（17）、旧原市町14号墳（18）、悪途東古墳群（19）などが存在する。

以上のように本遺跡に関連する周辺遺跡について概観したが、磯部地区ではこれまでに発掘調査件数そのものが少ないことと、すでに市街地化が進展していることから、本遺跡に関連する遺跡の分布状況があまり明確ではない。

第1図　塩ノ久保遺跡と周辺関連遺跡（1：50,000）



第２図　遺跡位置図（1：25,000）



第３図　調査区位置図（１：500）

Ⅳ　層　　序

塩ノ久保遺跡の基本層序は以下のとおりである。示標テフラは浅間Ａ軽石、浅間Ｂ軽石の存在が確認された。以下に各層の特徴を述べる。

Ⅰ層	黒褐色土層	浅間Ａ軽石（As－Ａ：1783年降下）を多量混入する。現在の耕作土層で、平均30cm程度の厚さである。粘性がややある。
Ⅱb層	灰褐色軽石層	浅間Ｂ軽石（As－Ｂ：1108年降下）の純層で、北調査区の南半部分にのみ存在する。
Ⅲ層	黒色土層	粘性、しまりともある。As－Ｂはまったく混入しない。古墳の周溝や流路部分にのみ存在する。厚さは一定していないが、流路では50cm以上堆積している。台地部分のⅢ層に相当すると推定される。
Ⅳ層	黄褐色粘質土層	ローム層の粘土化したもので、粘性、しまりとも強い。台地部分のⅤ層に相当すると推定される。
Ⅴ層	礫　層	基盤を形成すると推定される礫層であるが、自然堤防部分ではⅠ層の直下に存在する。

Ⅴ　遺構と遺物

1　古墳時代の遺構と遺物

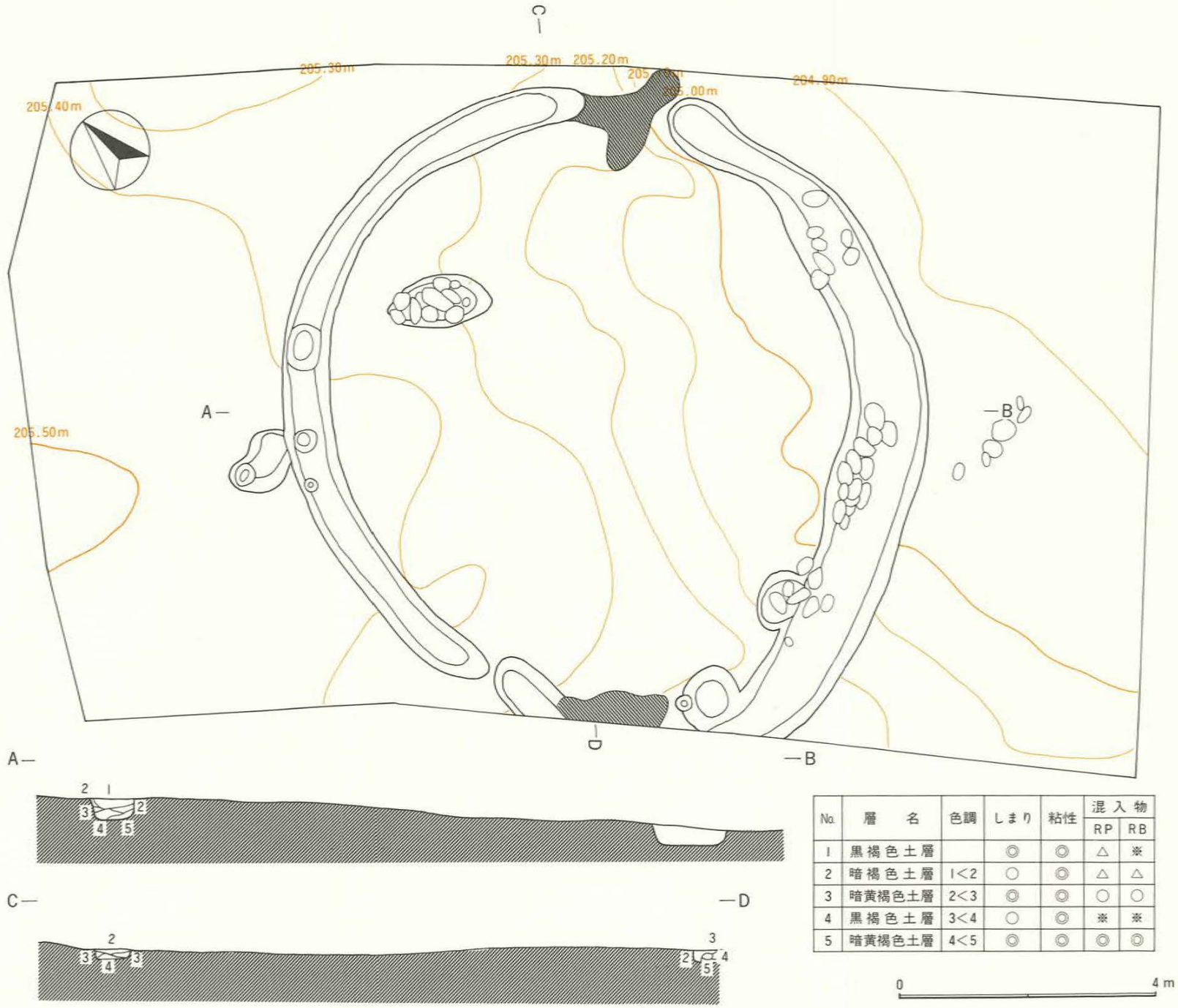
(1)　古　　墳

Ｋ－１号墳（第４図）

本古墳は北調査区の中央部で検出された。形態は円墳であり、全体では南北10.6ｍ・東西9.4ｍ、墳丘部では南北9.6ｍ・東西7.8ｍで南北にやや歪んでいる。表土下50cmほどで周溝が確認されたが、墳丘部はすでに削平されていた。また、調査区の北半部分ではⅠ層の直下がⅣ層となってしまうが、南半部分は流路部分に相当し、Ⅱb層が面的に存在していた。

周溝は上幅0.5～1.4ｍ・下幅0.3～0.9ｍ・深さ0.5ｍで、逆台形状を基本とするが、北半部分で狭く、南半部分で広い。北東部及び南東部では地山の礫層が露呈しており、この部分は周溝は掘削されていない。また、西部分では周溝が浅くなって途切れる。

周溝の南半部分では、葺石の一部と推定される河原石が内側から流れ込むような形で帯状に検



No.	層　名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	混入物 RB
1	黒褐色土層		◎	◎	△	※
2	暗褐色土層	1<2	○	◎	△	△
3	暗黄褐色土層	2<3	◎	◎	○	○
4	黒褐色土層	3<4	○	◎	※	※
5	暗黄褐色土層	4<5	◎	◎	◎	◎

第4図　K－1号墳実測図

出された。これらの河原石と周溝の底面との間には間層が存在しており、この配列は本来的なものではないことが理解される。また、南側の周溝覆土中や、これらの石の間から円筒埴輪の破片が少量検出された。

一方、墳丘内部では北部と南部で集石を伴う楕円形の土壙が2基検出されたが、北の土壙は石の間の土層中にはAs－A軽石が混入しており、耕作等に関連した二次的な攪乱である可能性が高い。

以上のように、K－1号墳は主体部が全く確認されず、遺存状態は非常に悪い。埴輪の形態等から判断して、竪穴系の古墳と推定される。

(2) 遺　　物

埴輪（第5図～第7図）

出土した埴輪は総数115点であった。すべて円筒埴輪の破片であると考えられる。現位置から出土したものは皆無であり、殆ど周溝内に崩落した状態で出土している。これらは胎土、焼成、整形技法から大きく7類に分類できる。

A類　7点　灰色〈10YR$^{6}/_{1}$〉内外断面ともに還元炎焼成できわめて堅緻。胎土は良く精選され、きわめて微細な黒色鉱物粒、最大∅0.1の白色鉱物粒を含む。

B類　19点　灰黄色〈2.5Y$^{6}/_{2}$〉外断面が還元炎焼成で堅緻。胎土は良く精選され、黒色鉱物粒はA類より少なく、白色鉱物粒の外に石英を含む。

C類　15点　橙色〈7.5YR$^{7}/_{6}$〉外表面のみ橙色を呈す。胎土は夾雑物を多く含む。酸化鉄、雲母、白色鉱物粒を多量に混入するが、黒色鉱物粒は僅かである。

D類　8点　橙色〈5YR$^{6}/_{6}$〉竪緻であるが、夾雑物は多い。白色鉱物粒、黒色鉱物粒が際立っている。

E類　7点　にぶい黄橙色〈10YR$^{7}/_{4}$〉竪緻で胎土もよく精選され、緻密である。白色鉱物粒、黒色鉱物粒は僅かに含まれている。

F類　54点　にぶい橙色〈5YR$^{7}/_{4}$〉酸化炎焼成でもろい。胎土は夾雑物を多く含み粗雑。黒色鉱物粒、赤色鉱物粒を混入する。

G類　5点　にぶい褐色〈7.5YR$^{5}/_{4}$〉酸化炎焼成でもろい。胎土は良く精選され、緻密である。黒色鉱物粒、白色鉱物粒を僅かに混入する。

にぶい黄橙色〈10YR$^{7}/_{4}$〉酸化炎焼成でよく精選された緻密な胎土を呈す。黒雲母、石英、酸化鉄を僅かに含む。

土器総数　115点

突帯形状

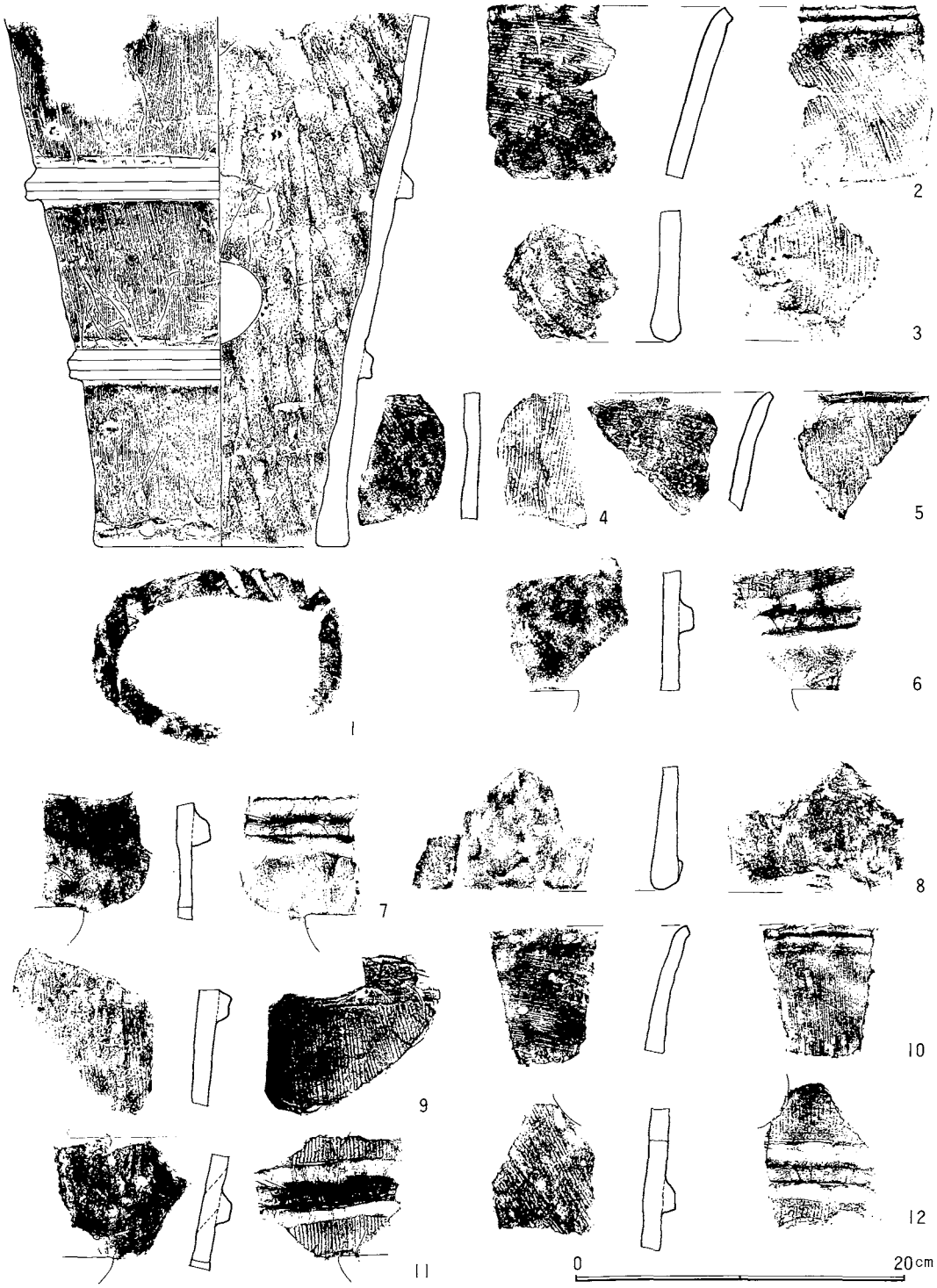
A類　しっかりしたつくりで、突帯上部はユビナデにより斜めに張り付くが、下部は器面にほぼ直交している。

B類　しっかりした台形を呈する。上部、下部とも斜めに器面へ張り付く。

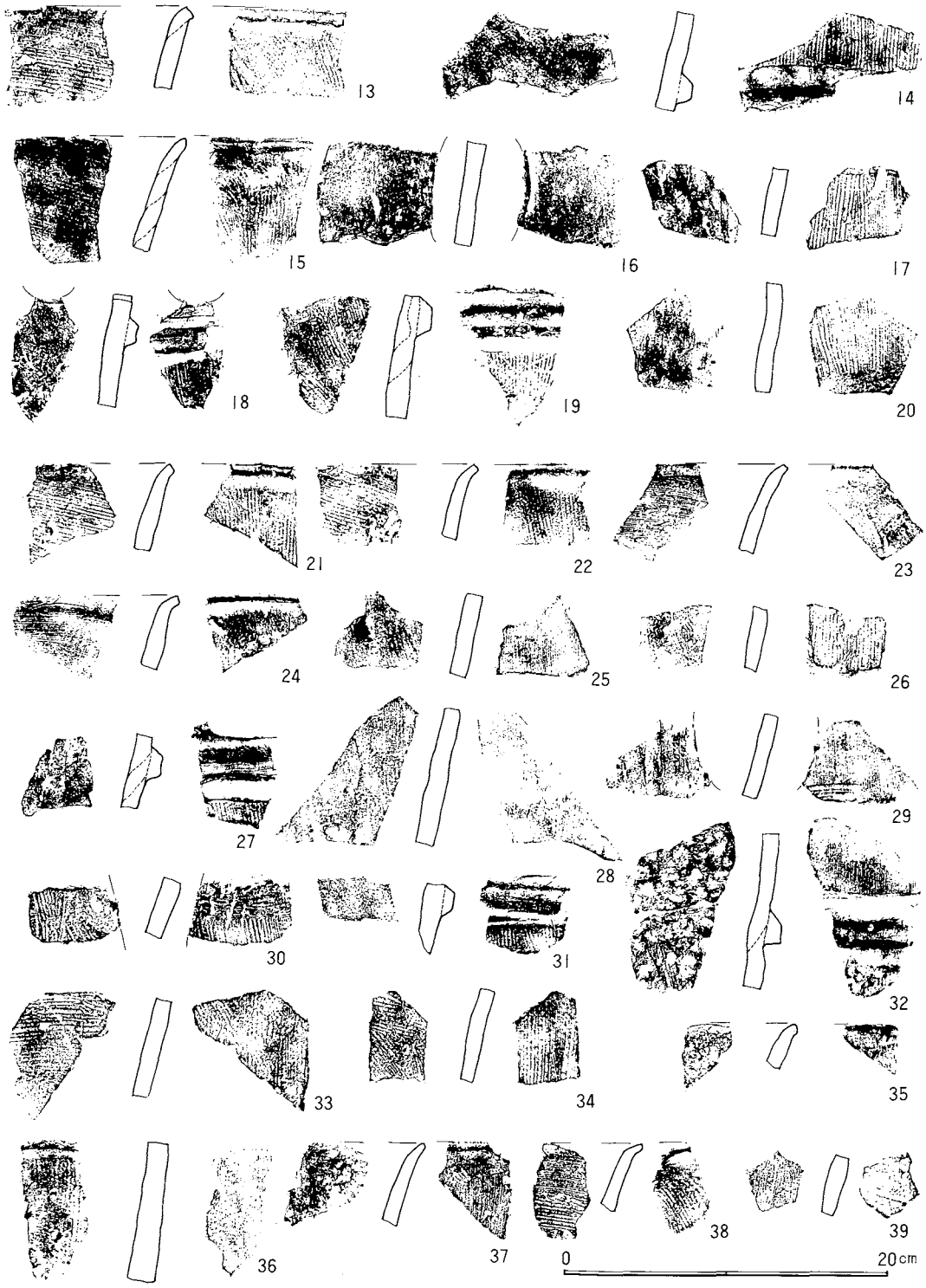
C類　くずれた台形で、突面をユビナデによりへこませ、3字形を呈す。

No.	帰属	部位	外面調整	内面調整・ハケメ	透孔	突帯	備考
1	ABC	基部～3段	タテハケ	ユビナデ	円	A	楕円円筒
2	C	最上段	タテハケ後口縁部ヨコナデ	ヨコハケ			
3	A	基部	タテハケ　ナデ	ユビナデ			
4	B		タテハケ	ナナメハケ後ヨコハケ			
5	D	最上段	タテハケ後口縁部ヨコナデ	ナナメハケ後口縁部ヨコナデ			
6	F		タテハケ	ユビナデ	半円	A	
7	F		タテハケ	ユビナデ	半円	A	
8	F	基部	タテハケ	ユビナデ			
9	B		タテハケ	タテハケ		A	
10	D	最上段	タテハケ後口縁部ヨコナデ	ヨコハケ			
11	B		タテハケ	ユビナデ	半円	B	
12	D		タテハケ	ユビナデ後タテハケ	円or半円	A	
13	B	最上段	ナナメハケ後ヨコナデ	ヨコハケ			
14	B		タテハケ	タテハケ		B	
15	B	最上段	タテハケ&ナナメハケ後口縁部ヨコナデ	ヨコハケ			
16	F		タテハケ	タテハケ	円？		
17	B		タテハケ	ユビナデ			
18	A		タテハケ	ユビナデ	円？	C	
19	B		タテハケ	タテハケ&ナナメハケ		B	
20	B		タテハケ	ユビナデ			
21	C	最上段	タテハケ後口縁部ヨコナデ	ヨコハケ			
22	F	最上段	タテハケ後口縁部ヨコナデ	ナナメハケ			
23	C	最上段	ナナメハケ後口縁部ヨコナデ	ヨコハケ			
24	F	最上段	ナナメハケ後口縁部ヨコナデ	ヨコハケ			
25	D		タテハケ	タテハケ			
26	B		タテハケ	ナナメハケ			
27	B		タテハケ	ユビナデ		C	
28	B		タテハケ	ユビナデ			
29	F		タテハケ	ユビナデ	円？		
30	E		タテハケ後ヨコナデ	ユビナデ後タテハケ	三角？		
31	F		タテハケ	ユビナデ		B	
32	F		タテハケ	ユビナデ		A	2片接合
33	F		タテハケ	ヨコナデ			
34	C		タテハケ	ナナメハケ後ヨコハケ			
35	F	最上段	タテハケ後ヨコナデ	ユビナデ			
36	A		タテハケ	ユビナデ			
37	F	最上段	タテハケ後口縁部ヨコナデ	ヨコハケ			
38	C	最上段	タテハケ後口縁部ヨコナデ	ヨコハケ			
39	C		タテハケ後ヨコナデ	タテハケ			
40	C	最上段	タテハケ	タテハケ後ナナメハケ一部ヨコハケ			2片接合
41	C		タテハケ	ユビナデ	半円	A	
42	F		タテハケ	ユビナデ		A	
43	C		タテハケ	ユビナデ			
44	G		タテハケ	ユビナデ		B	
45	A	最上段	タテハケ後口縁部ヨコナデ	ヨコハケ			
46	F	最上段	タテハケ後口縁部ヨコナデ	ナナメハケ後口縁部ヨコナデ			
47	A	最上段	タテハケ後口縁部ヨコナデ	ヨコハケ後口縁部ヨコナデ			
48		土師器甕	底部　ヘラケズリ				

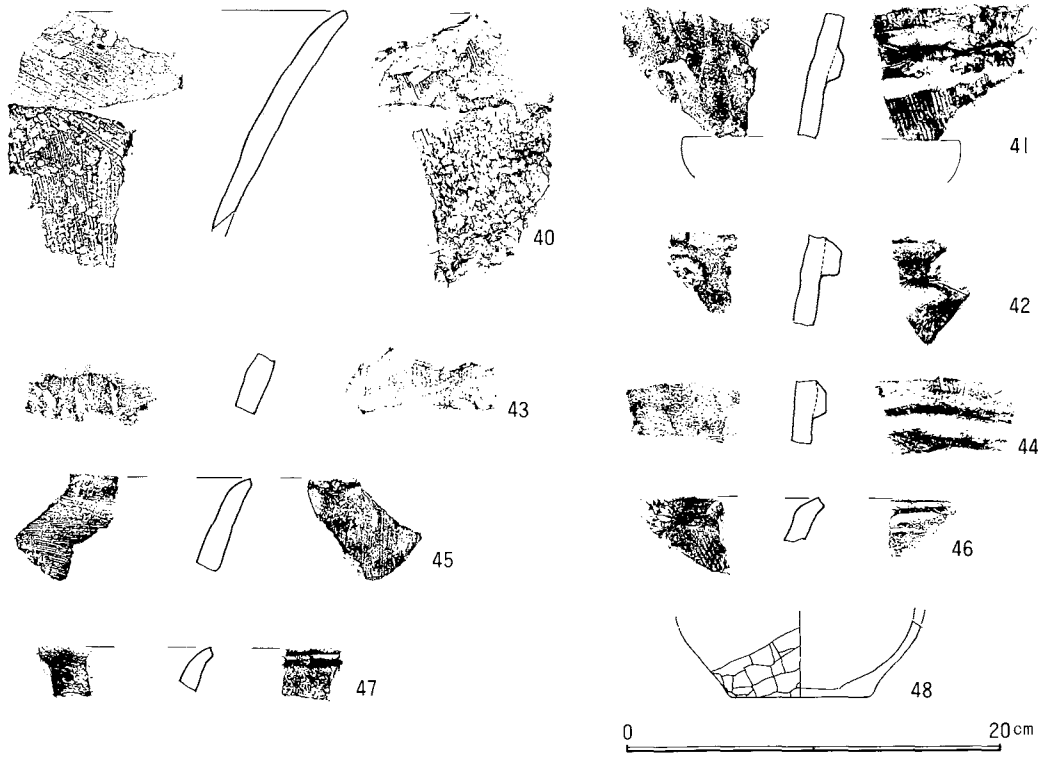
第1表　K－1号墳遺物観察表



第５図　Ｋ－１号墳出土遺物実測図(1)



第6図　K－1号墳出土遺物実測図(2)



第７図　Ｋ－１号墳出土遺物実測図(3)

１は円孔透かし孔を有する楕円形埴輪である。堅緻な還元炎焼成であり、胎土より秋間産と推定されることから重視される。畿内Ⅰ期にみられるようなものとは系譜的にはつながらないと考えられる。畿内では奈良県櫛山古墳、大阪府松岳山古墳など４世紀後葉の古墳にみられる。東国では長野県川柳将軍塚古墳にⅡ期の楕円形埴輪があり、円筒棺に利用されたものであるという。いずれも時期的に本墳とは離れているが、本品も円筒棺の可能性はあながち否定できない。群馬県内では原之城遺跡において透かし孔も突帯もない楕円形をした円筒埴輪状の土製品が知られているが、用途は定かでない。

３、18、36、43、47も還元炎焼成を呈する。１とは明らかに別個体であり、複数の存在が確実視される。半円形透かし孔を有するのは６、７、11、41で、いずれも２段目の突帯から４～５cm下の離れた位置に穿孔されていた。30に逆三角形透かし孔と思われるものがある。小破片であるため、半円形もしくは円形の可能性も捨て難いが、現状では直線的に刀子状工具で切られていることから逆三角形とした。管見ではⅣ期の千葉県清見台Ａ地区４号墳に類例があるが、Ⅴ期とすれば初出と思われる。

Ⅵ　成果と問題点

1　磯部古墳群について

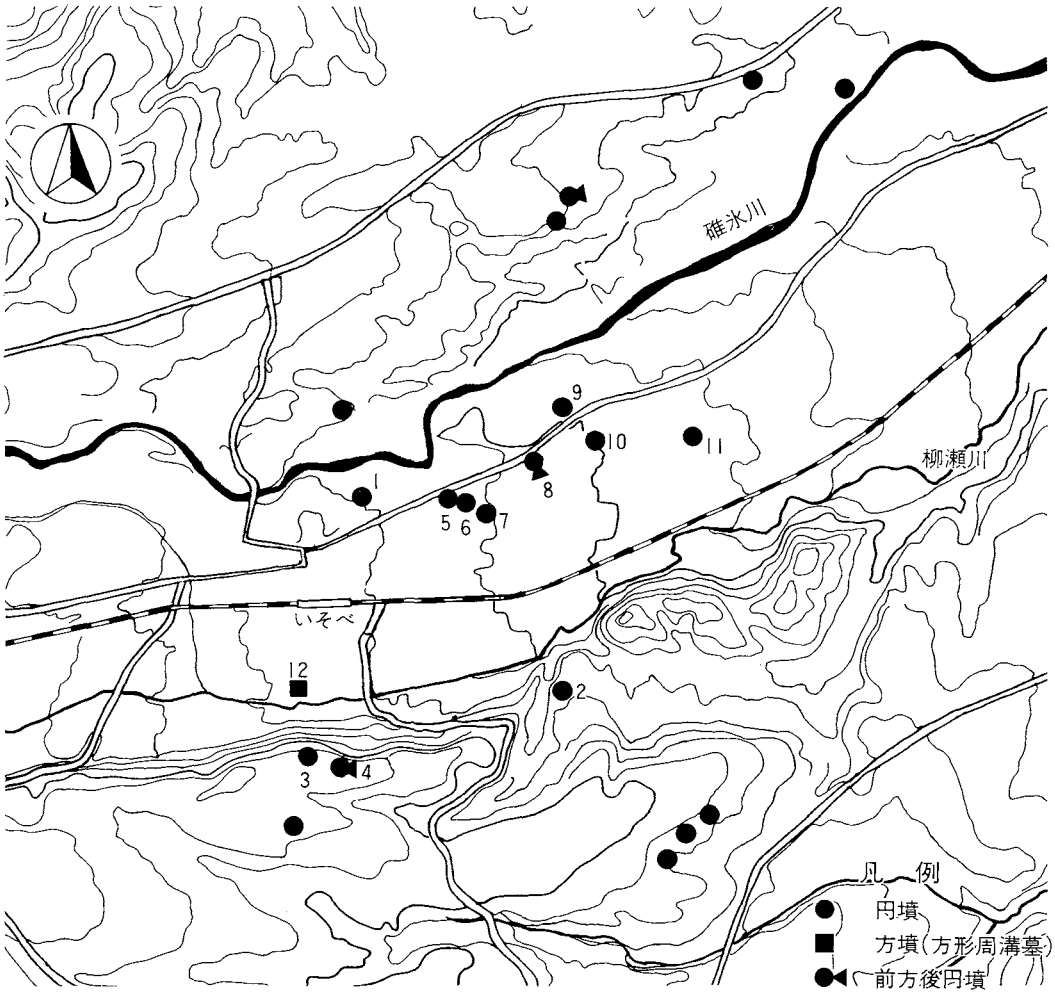
現段階で時期の明らかな古墳から古墳群の首長の変遷について考えてみたい。

調査された中で最古の古墳は、5世紀前半代の田中田・久保田の小方墳であるが、長谷津八幡山古墳（磯部2号墳）も初期古墳の可能性が高い。円墳は磯部の町を一望できる眺望の良い長谷津丘陵上に占地しており、埴輪を持たずに古式土師器を有することから4世紀後半～5世紀初頭の時期が考えられる。東に隣接する長谷津向山古墳（磯部3号墳）は『綜覧』では前方後円墳とされている。『安中市誌』に石製模造品剣形品と有孔円板が出土した記述があるのは本墳と思われ、最上段を赤彩した円筒埴輪の出土から5世紀後半代の構築が考えられる。磯部温泉の市街地では20基からなる古墳群が形成されているが、それらの構築は、5世紀終末から6世紀初頭頃の塩ノ久保K－1号墳を皮切りに、多くは横穴式石室を埋葬主体部に持つ小円墳で6世紀後半以降に築造されている。これらのうち磯部7号墳は『綜覧』では前方後円墳とされており、神明西古墳も帆立貝式古墳の可能性が高い。現存する中で、最大規模なのは『綜覧』9号の大塚古墳で、両袖型横穴式石室を開口している。一方、川の対岸には6世紀前半に簗瀬二子塚古墳が構築される。碓氷川流域最大の前方後円墳で、埋葬主体部には初めて横穴式石室が導入されている。墳丘に配列された円筒埴輪は藤岡地区からの搬入品であることから、その流通過程で興味をもつ。すでに塩久保1号古墳段階で安中秋間地区で焼成されはじめているのに対しわざわざ遠隔地から供給している点、留意しておく必要がある。

2　塩ノ久保K－1号墳の年代観

(1)　半円形透かし孔について

本古墳の円筒埴輪からは、円形の透かし孔の外に半円形の透かし孔も確認された。こうした形態の透かし孔については比較的時期の限定できる資料として注目されるものである。本古墳の場合、ほとんど小破片であったため同一個体に両者が共存しているかどうかは明らかでないが、おそらく3段をもって構成されると考えられることから、透かし孔は中段に一対穿孔されるのみであると推定される。また、出土埴輪をもって当初の配列を復元するまでには当然至っていないた



1	塩ノ久保K－1号墳（『綜覧』記載漏）	円　　墳	西上磯部字塩ノ久保1142、1143、1157－1
2	仮寝塚古墳（『綜覧』磯部町1号）	円　　墳	西上磯部乙1708-2
3	長谷津八幡山古墳(『綜覧』磯部町2号古墳)	円　　墳	西上磯部字向山695
4	長谷津向山古墳（『綜覧』磯部町3号）	前方後円墳	西上磯部字向山703
5	磯部4号古墳	円　　墳	西上磯部字西谷戸1199-3
6	磯部5号古墳	円　　墳	西上磯部字西谷戸乙1206
7	磯部6号古墳	円　　墳	西上磯部字西谷戸1225
8	磯部7号古墳	前方後円墳	西上磯部字舞台乙1394
9	磯部8号古墳	円　　墳	西上磯部字舞台1391．1392
10	大塚古墳（『綜覧』磯部町9号）	円　　墳	東上磯部1053
11	神明西古墳（『綜覧』記載漏）	帆立貝式	東上磯部904
12	田中田・久保田K－1号墳	方墳(方形周溝墓)	西上磯部字田中田

第8図　磯部地区の古墳（1：25,000）

め、これらの比率についても明らかにしがたい。

半円形透かし孔はこれまでに、全国で本古墳を含めて約100ケ所で確認されている。それらのほとんどは古墳からの出土であるが、円筒棺も比較的多く、この種の埴輪のひとつの特徴となっている。生産址では、埼玉桜山窯址が唯一の報告例である。本古墳出土品は安中秋間産と考えられることから、その需給関係を考える上でも興味深い。

分　布

半円形透かし孔の分布を見ると、管見では、九州、四国では確認できないが、あとは中国地方から東北地方までほぼ本州に行き渡っている。しかし、主流はやはり関東地方で、特に群馬、埼玉に集中して発見例が報告されている。畿内では比較的古い段階に限定されており、瀬戸内沿岸、山陰、北陸、東海も確認できるが極めて希有な例である。これらは普通円筒埴輪よりもむしろ特殊な器形が多い。たとえば、京都府作山古墳例は壺形埴輪の変形である無頸壺形埴輪であり、鳥取里仁32号墳例は鰭付壺円筒埴輪である。有名な布留遺跡例や、古市方形墳、長原塚の本遺跡例では朝顔形埴輪、鰭付朝顔形埴輪に、岡山金蔵山古墳では鰭付円筒埴輪に半円形透かし孔が確認できる。群馬県内でも古い例は器台形埴輪や壺形埴輪に見ることができる。北限は東北地方で、宮城県には比較的多く分布している。

時　期

畿内では、半円形透かし孔は川西編年のII期（四世紀後葉）から確認されている。前述のとおり、4世紀代の普通円筒埴輪の例は希なようであり、確認されているのは特殊な器形が多い。大阪府弁天山C1号墳、長原塚の本円筒棺、奈良県古市方形墳、マエ塚古墳、布留遺跡、斑鳩瓦塚古墳、京都府作山古墳等、いずれも下限は5世紀前半代である。その後、III期になると透かし孔は多様性を欠き、円形にほぼ画一化される。しかし、ウワナベ古墳のように三角形や方形透かし孔の残る例外も報告されている。

他の周辺地域でも鳥取里仁32号墳、岡山金蔵山古墳、福井手操城山古墳、沼津長塚古墳例と関東以西では、5世紀中頃までにはいずれも消滅している。一方、関東地方では群馬、埼玉を中心に100基以上で確認されており、二次調整B種横ハケメ消失後の川西編年V期までは明らかに残ることが確認されている。しかし、V期の中でも比較的古い段階に限られ、大形古墳と中小古墳では在り方も若干違うようであるが、概ね須恵器編年のMT15型式の中で消滅している。故に6世紀の前半代には関東でも消失するものと思われる。

系　譜

関東でも出現段階、即ち、4世紀後半～5世紀初頭では特殊な器形が多い。藤岡市堀之内DK－4号墳は特異な透かし孔をもつ壺形埴輪であるし、神奈川小金塚古墳の朝顔形埴輪は出土状況から円筒棺の可能性が指摘されている。さらに、佐自塚古墳、下郷天神塚古墳のように器台形埴輪

所在地	古　　墳　　名	墳　　形	規 模	時 期	透孔形態	赤彩	黒斑	二 次 調 整
安 中 市	塩ノ久保Ｋ－１号墳	円　　墳	10ｍ		○◡	無	無	無
前 橋 市	七ツ石１号墳	円　　墳			○◡	有	無	無
前 橋 市	芳賀西部団地18号墳	円　　墳		５Ｃ末	○◡	有	無	無
前 橋 市	芳賀西部団地15号墳	円　　墳		５Ｃ末	○◡	有	無	無
前 橋 市	芳賀西部団地12号墳	円　　墳		５Ｃ末	○◡	有	無	無
前 橋 市	芳賀西部団地24号墳	円　　墳			◡	有	無	無
前 橋 市	芳賀西部団地22号墳	円　　墳			○◡	有	無	無
前 橋 市	遠見山古墳	前方後円墳	135ｍ	５Ｃ末	○◡		無	無
前 橋 市	上縄引埴輪棺	埴　輪　棺	——	５Ｃ末	◡	無	無	無
前 橋 市	舞台１号墳	帆 立 貝 式			○◡		無	Ｂヨコ
前 橋 市	今井神社埴輪棺	埴　輪　棺	——		◡		無	Ｂヨコ
前 橋 市	今井神社古墳	前方後円墳			○◡		無	Ｂヨコ
伊勢崎市	お富士山古墳	前方後円墳	125ｍ		○□◡		有	Ｂヨコ・Ｃヨコ
伊勢崎市	丸塚山古墳	帆 立 貝 式	81ｍ		○◡		無	Ｂヨコ
赤 堀 町	五目牛18号墳	円　　墳			○□◡		無	Ｂヨコ
赤 堀 町	五目牛20号墳	円　　墳			○◡		無	
赤 堀 町	五目牛21号墳	円　　墳			◡		無	
粕 川 村	白藤Ｖ２号墳	円　　墳			○◡		無	
粕 川 村	白藤Ｖ４号墳	円　　墳	18ｍ		○◡		無	
粕 川 村	白藤Ｐ６号墳	円　　墳	18ｍ		○◡		無	
粕 川 村	白藤Ｐ１号墳	円　　墳	18ｍ		○◡		無	
粕 川 村	白藤Ａ１号墳	円　　墳	14ｍ		○◡		無	
粕 川 村	白藤Ｆ１号墳	円　　墳			○◡		無	
粕 川 村	白藤Ｆ２号墳	円　　墳	18ｍ		○◡		無	
粕 川 村	白藤Ｙ１－２号墳	円　　墳			○◡		無	Ｂヨコ
新 里 村	広間地西３号埴輪棺	埴　輪　棺	——		◡		無	
月夜野町	三ッ峰神社裏１号墳	円　　墳	10ｍ		○◡		無	
昭 和 村	鏡石古墳	円　　墳	７ｍ		◡	有	無	
吾 妻 町	四戸３号墳	円　　墳			○◡		無	
子 持 村	三角古墳	円　　墳			◡		無	
子 持 村	黒井峰ＦＡ下古墳				◡	有	無	
子 持 村	有瀬１号墳	円　　墳	7.4ｍ		○◡		無	
渋 川 市	東町古墳	方　　墳		６Ｃ前	◡		無	
渋 川 市	行幸田山Ａ－２号墳	円　　墳	26ｍ	６Ｃ前	◡		無	
渋 川 市	行幸田山Ａ－３号墳	円　　墳	28ｍ	６Ｃ前	○◡⬭		無	
渋 川 市	行幸田伊勢森古墳	円　　墳		５Ｃ後	◡		無	
渋 川 市	大崎１号墳	円　　墳		６Ｃ前	◡		無	
渋 川 市	大崎３号墳	前方後円墳		６Ｃ前	◡		無	
渋 川 市	空沢７号墳	円　　墳			◡		無	
渋 川 市	金井前原古墳			６Ｃ前	◡		無	
群 馬 町	井出二子山（保渡田愛宕塚）古墳	前方後円墳			○◡		無	Ｂヨコ
群 馬 町	保渡田八幡塚古墳	前方後円墳			○◡		無	Ｂヨコ
群 馬 町	保渡田薬師塚古墳	前方後円墳			○◡		無	
群 馬 町	二子山埴輪棺	埴　輪　棺	——		○◡		無	
高 崎 市	若宮八幡北古墳	帆 立 貝 式	46.3ｍ		○□◡		無	
高 崎 市	平塚古墳	前方後円墳			○◡		無	Ｂヨコ
高 崎 市	道場１号墳	前方後円墳			◡		無	
高 崎 市	不動山古墳	前方後円墳			○◡		無	Ｂヨコ
富 岡 市	桐淵８号墳	円　　墳			○◡		無	
箕 郷 町	下芝谷ツ古墳	方　　墳			○◡		無	

第２表　関東における半円形透かし孔(1)

所在地	古　　墳　　名	墳　形	規 模	時 期	透孔形態	赤彩	黒斑	二 次 調 整
玉 村 町	下郷５号（SZ37）墳	前方後円墳	50m		○◡		無	
玉 村 町	下郷１号（SZ33）墳	円　　墳			◡		無	
玉 村 町	下郷天神塚古墳	前方後円墳			○▽△◡○			
大 泉 町	高徳寺東11号墳	帆 立 貝 式			○◡			Ｂヨコ
太 田 市	天神山古墳	前方後円墳	210m		○□◡		有	Ｂヨコ
太 田 市	天神山Ａ陪塚	円　　墳	35m		◡□			Ｂヨコ
太 田 市	塚廻り１号墳	帆 立 貝 式	22.5m		○□◡		無	
太 田 市	塚廻り２号墳	帆 立 貝 式	24m		○◡		無	
太 田 市	塚廻り３号墳	帆 立 貝 式	23.6m		○□◡		無	
太 田 市	塚廻り４号墳	帆 立 貝 式	22.5m		○◡		無	
藤 岡 市	七輿山古墳	前方後円墳	145m		○◡□		無	Ｂヨコ
藤 岡 市	白石稲荷山古墳	前方後円墳	170m	５ＣⅡ	○◡	一部有	有	Ｂヨコ
藤 岡 市	十二天塚古墳	長　方　墳	36.8m	５ＣⅢ	○◡		有	Ｂヨコ
藤 岡 市	堀之内DK－４号墳	前方後方墳			◡○（壺形）		無	
藤 岡 市	平井村485号墳	円　　墳	16.5m		○◡		無	
藤 岡 市	小野村２号墳	円　　墳		５ＣⅢ	○◡			Ｂヨコ
神 奈 川	小金塚古墳	円　　墳	49m	４Ｃ後	○▽or◡	朝顔		Ａヨコ
千　　葉	永野台古墳			５Ｃ後	○◡			
千　　葉	東深井２号墳				○◡			
茨　　城	佐自塚古墳	前方後円墳	58m	５ＣⅠ	◡☽（器台）			
栃　　木	大和田富士山古墳	前方後円墳	50m	５Ｃ後	○◡			
栃　　木	塚山南周溝西埴輪棺Ａ	埴　輪　棺	——		◡			
栃　　木	塚山南周溝北埴輪棺	埴　輪　棺	——		○◡			
栃　　木	塚山西周溝埴輪棺	埴　輪　棺	——		○□◡			
栃　　木	塚山東埴輪棺	埴　輪　棺	——		○◡			
栃　　木	塚山西古墳	帆 立 貝 式	64m	５Ｃ後	○◡			
栃　　木	塚山南古墳	帆 立 貝 式	60m	５Ｃ末	○◡			
栃　　木	塚山北古墳	帆 立 貝 式			○◡			
栃　　木	宮内２号墳				○◡			
栃　　木	助戸十二天古墳	帆 立 貝 式		５Ｃ後	○◡			
埼　　玉	金讃神社古墳	円　　墳	67m	５ＣⅢ	◡			
埼　　玉	上里長浜寺浦埴輪棺	埴　輪　棺	——		◡			
埼　　玉	長沖１号墳	円　　墳	16m	６Ｃ前	○◡		無	
埼　　玉	長沖２号墳	円　　墳	15m	６Ｃ前	○◡		無	
埼　　玉	長沖14号墳	円　　墳	34m	５Ｃ後	○◡		無	Ｂヨコ
埼　　玉	長沖25号墳	前方後円墳	40m	６Ｃ	○◡		無	
埼　　玉	公卿塚古墳	円　　墳	50m	５Ｃ中	○◡			
埼　　玉	熊谷後５号墳	円　　墳	15m	５Ｃ後	○◡		無	Ｂヨコ
埼　　玉	本庄東小学校１号墳	円　　墳	20m	５ＣⅢ	◡		無	Ｂヨコ
埼　　玉	美里塚本山73号墳	円　　墳	12m	５ＣⅣ	◡		無	Ｂヨコ
埼　　玉	生野山９号墳	円　　墳	42m	５ＣⅢ	◡			Ｂヨコ
埼　　玉	生野山10号墳	円　　墳	21m	５ＣⅢ	◡			Ｂヨコ
埼　　玉	生野山14号墳	円　　墳	17m	５ＣⅢ	◡			
埼　　玉	岡部白山12号墳	円　　墳		６Ｃ前	○◡		無	
埼　　玉	白山埴輪棺	埴　輪　棺	——	６Ｃ前	◡		無	
埼　　玉	伊奈利塚古墳			５ＣⅣ	◡		無	
埼　　玉	桜山窯跡灰原	窯　　跡	——		○◡		無	
埼　　玉	大稲荷１号墳	円　　墳	24m	６ＣⅠ	○□◡		無	
埼　　玉	稲荷山古墳	前方後円墳	120m	５Ｃ末	○□◡		無	
埼　　玉	二子山古墳	前方後円墳	135m	６Ｃ前	○□◡		無	
埼　　玉	横塚山古墳	前方後円墳	50m	６ＣⅠ	○◡		無	Ｂヨコ
埼　　玉	鎧塚古墳	帆 立 貝 式	44m	６Ｃ初	○◡		無	

第３表　関東における半円形透かし孔(2)

の一部に施されたものもある。このように半円形透かし孔の発生当初は、特殊器台形埴輪などに見られる、いわゆる直弧文の隙間をうめた半円形に起源が求められるようであり、巴形や三角形などとともに模様の一部を構成していたものが、後に独立して用いられたものと考えられる。当初の普通円筒で、透かし孔の形態が多様化しているのはこれらのなごりと考えられ、こうした変遷過程の裏付けとなっている。関東ではそれらの形態に画一化する時期が、特種円筒(註1)から普通円筒へと置き換わる時期と一致しているようであり、特種円筒に画一化された形態がすでに波及している畿内地方とは若干様相が異なっている。また、関東では円形だけではなく、方形もしくは長方形のみの個体、画一化せずに円形、方形、三角形等が併存する個体と、バリエーションの多い点も畿内とは異なっている。関東地方における初期の普通円筒をもつ朝子塚古墳、太田八幡山古墳、高崎浅間山古墳、別所茶臼山古墳などに半円形透かし孔が認められないことから、半円形だけは画一化する時期が若干遅れていると考えられ、普通円筒への波及に若干のヒアタスがあったようである。そしてその波及の時期は、群馬県内では川西編年のⅢ期、5世紀第Ⅱ四半期と考えられる。

普通円筒における半円形透かし孔の初源は、太田天神山古墳、お富士山古墳、白石稲荷山古墳、十二天塚古墳といった東国最大の規模をもつ、県内有力首長墓にいち早く採用される。この時期では同一個体の共伴関係は明らかでないが、円孔と長方形、あるいは円孔と半円形という組み合わせが大形古墳では一般的であったといえるが、同時期でも女体山古墳、赤堀茶臼山古墳、上細井稲荷山古墳といった帆立貝式古墳もしくは中小の前方後円墳では半円形透かし孔は確認されていない。また、円形透かし孔とのセット関係は半円形透かし孔が消滅していく最終段階まで併存している可能性も高いが、同一個体における共伴例は確認されていない。

川西編年Ⅳ期とⅤ期の最古段階を含む5世紀後半代の埴輪では伊勢崎丸塚山古墳、今井神社古墳、舞台1号墳、西毛地区では井出二子山（保渡田愛宕塚）古墳、不動山古墳、平塚古墳、七輿山古墳、総社遠見山古墳に継承される。この時期、東毛地区には前方後円墳の数が少なく規模も劣り、西毛地区の優位性は否めない。

その後、横穴式石室導入段階である6世紀前半代では、様相がさらに複雑となる。横穴式石室墳としては、地蔵山古墳群の五目牛20号墳、同21号墳、三ツ峰神社裏1号墳、四戸古墳群、有瀬1号墳といった中小円墳や埴輪棺には採用されるが、築瀬二子塚古墳、正円寺古墳、前二子古墳、王山古墳、轟山A号墳、本郷稲荷塚古墳といったこの時期を代表する前方後円墳には採用されない。一方、同じⅤ期でも竪穴系埋葬主体部では、多くの古墳で採用されているが、朝倉鶴巻塚古墳、亀塚山古墳の様相が今ひとつはっきりしないが太田地区の古墳では採用されないものも多いようである。これは太田地区では、竪穴系埋葬主体部が比較的遅くまで残ることに起因していると考えられ、横穴式石室墳では中小円墳に古式な様相の埴輪が残るようである。

(2) 上野国における５～６世紀前半の円筒埴輪

ＦＡ前後の埴輪について

円筒埴輪の編年研究は、川西編年以降さほど進歩していない。というのも、近年の発掘調査量の飛躍的増大は、多くの新発見を相次いで生み出し、従来言われているほどスムーズに形態変化を遂げていないことが明らかになってきた。特に本稿で扱う川西編年Ｖ期は、複雑な様相を呈しており、細分が難しい状況にある。こうした中にあって、メルクマールとなる半円形透かし孔の存在は、今後の編年研究に寄与できるものであると確信している。ここでは若干重複する部分もあるが、それらの前後の時期、即ちＦＡ層を挟む前後の時期の埴輪について概観し、まとめとしてみたい。

半円形透かし孔は、群馬県内では円形透かし孔の次に量の多い透かし孔形態である。円形を二分割した下側の部分に当たるわけで、本県では金蔵山古墳で認められるような円形の上半分をくりぬく形態は認められない。直線部分の上辺が突帯部分に重なることが多いので、突帯にあたって円形にくりぬけなかったという意見もある。しかし、透かし孔の大きさもかなり多様化しており、大きさで充分に調節できるはずなので、直線的にくりぬくということを重視したい。

この時期でも新しい段階になる横穴式石室墳では前方後円墳に認められないことは先に述べた。これらは、新しい埋葬方法の導入とともに古式の様相を払拭した形態の埴輪祭祀を行っていると解釈すれば整理できる。問題なのは一部の小円墳では横穴石室墳に残ること。また、ＦＡ下の古墳にも円形透かし孔のみのものがあることである。ここではむしろ希有な例としてあげられるＦＡ下で円形透かし孔のみで占める一群に視点をおき、分布、時期、系譜等を考えてみたい。

確実にＦＡ層を確認しているものとしては古海原前１号墳があげられる。東毛地区、特に太田周辺ではもともと半円形透かし孔の分布が希薄であったのだが、本古墳の場合、円筒埴輪の突帯貼付に際してタタキ状の装飾的押圧が見られ、尾張周辺とのかかわりが指摘されている。(註２) これに類似したもので、突帯に押圧を加える技法が畿内Ⅳ期や周辺の若狭等でも認められるというが、これらはむしろ備前、備中、美作を中心に流行したものの影響と考えられている。(註３) 群馬県内でも、やはりＦＡ下だが半円形透かし孔をもたない富田東原６号墳例を管見では確認しており、半円形透かし孔が後まで残らない地域と工人の関連で興味深い。こうした局所的な工人達の移動、あるいは介入というものがこの時期を複雑にしている要因と考えられる。

このほか、上芝古墳、境町三筆２号墳、渋川空沢３号墳も確実にＦＡ下の資料であるが埴輪が断片的であり、地蔵山古墳群中の何基かにも同様の可能性のあるものが認められる。また直接ＦＡは確認していないが、竪穴系と推定される古墳として広瀬古墳群の朝倉鶴巻塚古墳があげられ

古 墳 名	墳　形	埋葬主体部	出土須恵器	ＦＡ層	透孔形態	備　考		
						赤色塗彩	二次調整	黒 斑
太田天神山	前方後円墳	長持形石棺		下	○□◡		Ｂヨコ	有
天神山A陪塚	円　　墳	不　　明			◡□		Ｂヨコ	有
お 富 士 山	前方後円墳	長持形石棺		下	○□◡		B・Cヨコ	有
上細井稲荷山	前方後円墳？	竪　穴　系			○□or□	有	有	有？
白石稲荷山	前方後円墳	礫　槨　2			○◡	有	Ｂヨコ	有
赤堀茶臼山	帆 立 貝 式	木 炭 槨 2			○□or□			
十 二 天 塚	長　方　墳	礫　　槨			○◡		Ｂヨコ	有
達　磨　山	円　　墳	竪 穴 系 3			○□		有	？
舞 台 1 号	帆 立 貝 式	不　　明		下	○◡	有	Ｂヨコ	無
今 井 神 社	前方後円墳	竪　穴　系			○◡	有	Ｂヨコ	無
若宮八幡北	帆 立 貝 式	舟 形 石 棺			○□◡		Ｂヨコ	無
七　輿　山	前方後円墳	不　　明			○□◡		Ｂヨコ	無
丸　塚　山	帆 立 貝 式	箱式石棺 3			○◡		Ｂヨコ	無
井出二子山（保渡田愛宕塚）	前方後円墳	舟 形 石 棺		下	○◡		Ｂヨコ	無
保渡田八幡塚	前方後円墳	舟 形 石 棺			○◡	有		無
保渡田薬師塚	前方後円墳	舟 形 石 棺			○◡	有		無
遠　見　山	前方後円墳	不　　明			○◡			無
朝倉鶴巻塚	前方後円墳	竪 穴 系 ？			○			無
塚廻り 1 号	帆 立 貝 式	竪　穴　系			○□◡			無
塚廻り 2 号	帆 立 貝 式	竪　穴　系			○◡			無
塚廻り 3 号	帆 立 貝 式	竪　穴　系			○□◡			無
塚廻り 4 号	帆 立 貝 式	竪　穴　系			○◡			無
上　　芝	帆 立 貝 式	竪　穴　系		下	○			無
原 前 1 号	帆 立 貝 式	竪　穴　系	ＴＫ47型式	下	○	有		無
空 沢 3 号	円　　墳			下	○			
下 芝 谷 ツ	方　　墳	竪　穴　系	ＭＴ15型式	上	○◡			無
簗瀬二子塚	前方後円墳	横穴式石室	ＭＴ15型式		○			無
前　二　子	前方後円墳	横穴式石室	ＭＴ15型式		○			無
正　円　寺	前方後円墳	横穴式石室 竪 穴 系 1			○			無
轟 山 Ａ 号	前方後円墳	横穴式石室	ＭＴ15型式		○			無
王　　山	前方後円墳	横穴式石室	ＭＴ15型式	上	○			無
本郷稲荷塚	帆 立 貝 式	横穴式石室	ＭＴ15型式		○			無
御　三　社	前方後円墳	横穴式石室			○			無
高　　塚	前方後円墳	横穴式石室	ＴＫ10型式	上	○			無

第４表　群馬県内のＦＡ前後の円筒埴輪

る。埴輪に関しては断片的な表採資料であるので確実なことはいえないが、粘土槨と推定される埋葬主体部をもち、大型品を含む多量の石製模造品を出土していることからＦＡ降下よりは先行する。また、ＦＡの前後関係は明らかでないが、台所山古墳、天神山１号墳といった竪穴系の古墳では半円形透かし孔が確認されていない。このように、配列された円筒埴輪において円形透かし孔のみで占める一群というものは群馬県内では５世紀の前半代に出現して以来、細々とではあるが系譜的につながり、６世紀前半代にはすべて円形に取って変わり、埴輪の消滅するまで続いている。一方、半円形透かし孔は方形透かし孔よりも古くからあり、ＦＡ降下後まで継続したのちに円形透かし孔に淘汰されていく。

初期横穴石室墳では、大形前方後円墳、小形前方後円墳もしくは帆立貝式古墳においては、半円形透かし孔は消失しているが、小円墳の一部では残存している。このことは、地域差あるいは時間差と考えるよりもむしろ上位階層から浸透してくる様相の一端を示しているのではなかろうか。

（註１）一般に言われていた特殊円筒形埴輪（器台円筒）＝特殊器台形埴輪との混乱を避けるため、ここでは仮に特種円筒と呼んでおく。朝顔形円筒埴輪、鰭付円筒埴輪、朝顔形鰭付円筒埴輪、鰭付壺円筒埴輪、無頸壺形埴輪などと呼ばれているものを指す。また、本文の一部では特殊器台形埴輪をも含めている部分もある。

（註２）石関伸一氏のご教示による。なお、タタキは無いが同様の技法が、太田天神山古墳、伊勢崎お富士山古墳においても認められるという。

（註３）川西宏幸（1978）による。

（参考文献）

梅沢重昭　1986　「毛野の埴輪－５世紀におけるその受容の様相」『考古学ジャーナル』253

大江正行　1990　『本郷的場古墳群』群馬県教育委員会　㈶群馬県埋蔵文化財事業団

大塚昌彦　1985　「渋川市域における埴輪」『埴輪の変遷 ― 普遍性と地域性 ― 』北武蔵古代文化研究会

加部二生　1985　「前橋地区の埴輪」『埴輪の変遷 ― 普遍性と地域性 ― 』北武蔵古代文化研究会

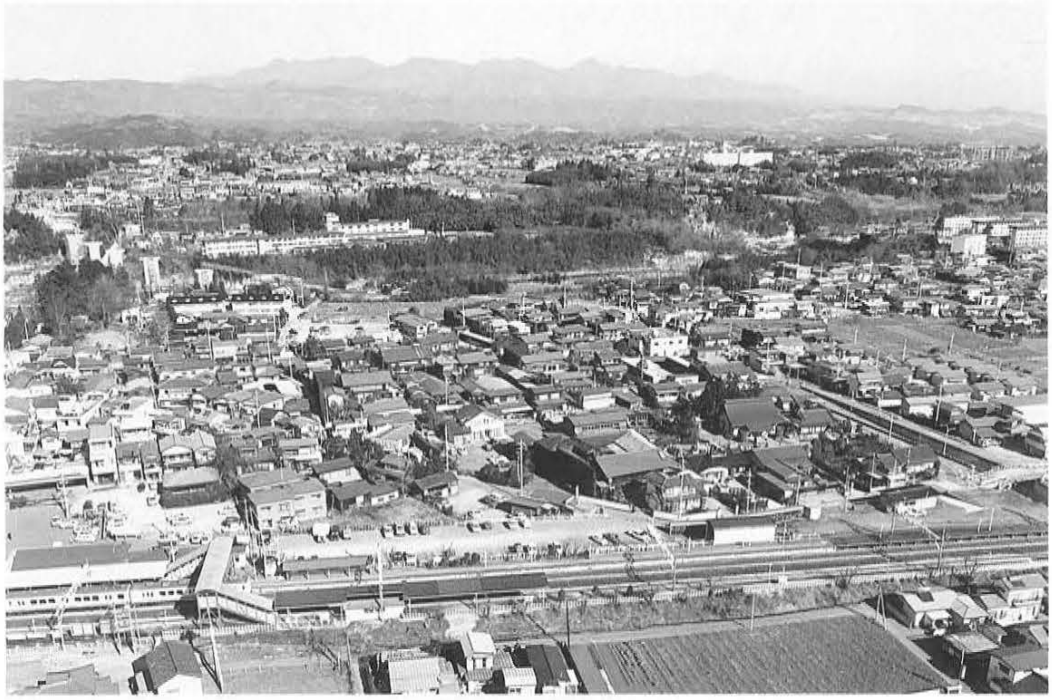
川西宏幸　1978　「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻－２号　日本考古学会

橋本博文　1976　「東国への初期円筒埴輪波及の一例とその位置づけ」『古代』59・60合併号

巾　隆之　1980　『下郷』群馬県教育委員会

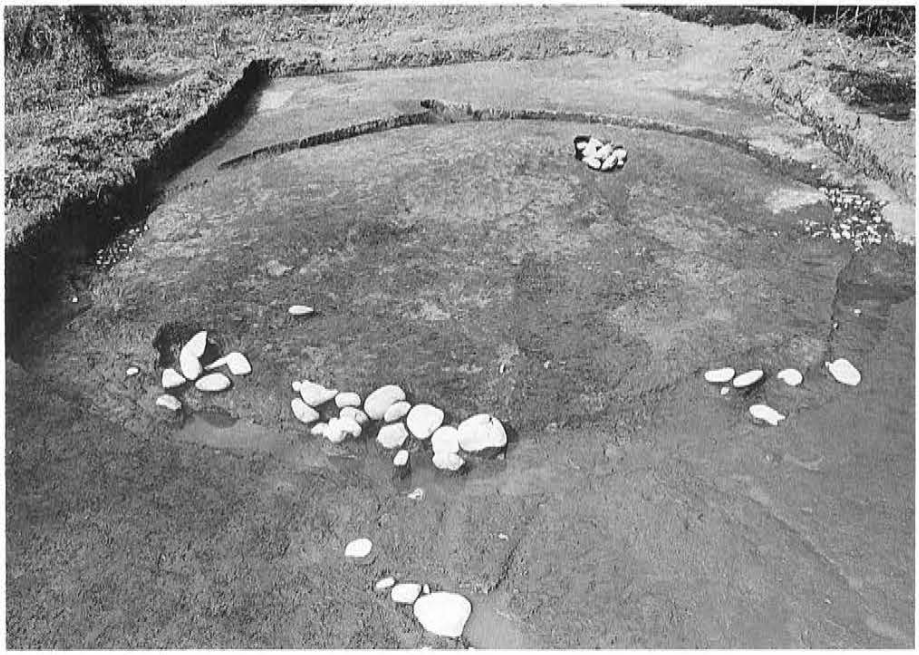
写　真　図　版

図版－1

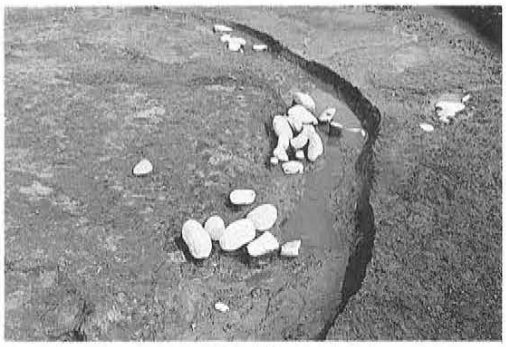


塩ノ久保遺跡遠景

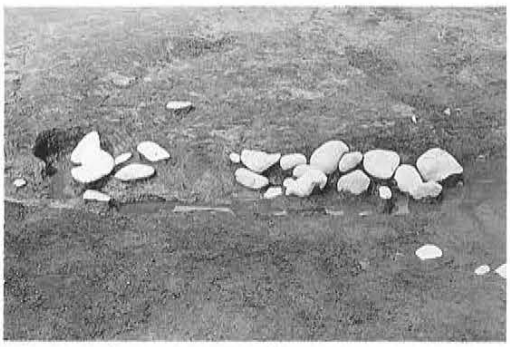
塩ノ久保遺跡調査区全景



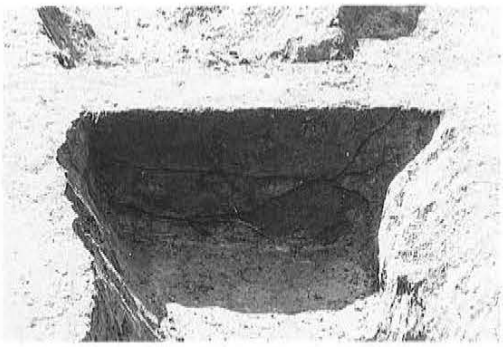
K－1号墳全景



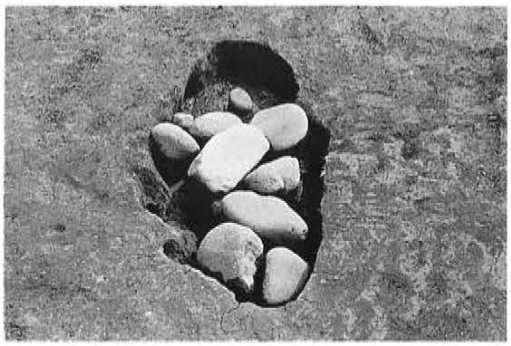
周溝南側部分（1）



周溝南側部分（2）



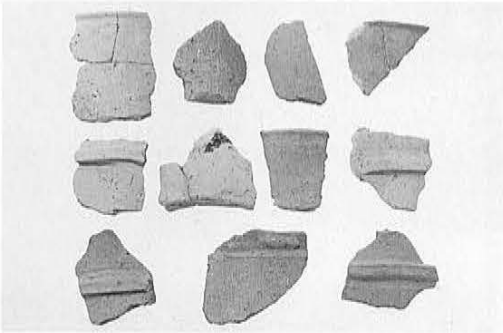
周溝土層断面



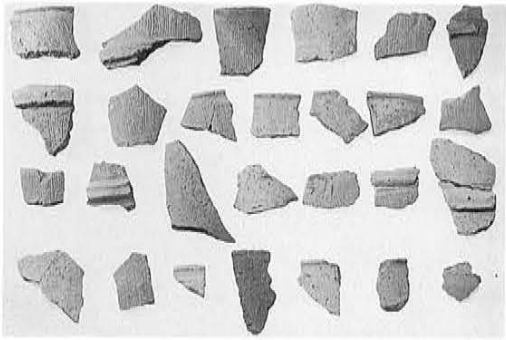
集石を有する土壙

図版－3

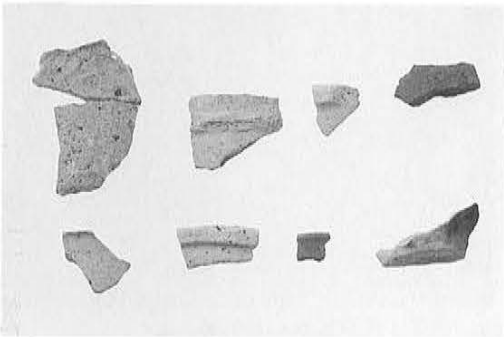
K－1号墳出土の埴輪(1)



K－1号墳出土の埴輪（2）



K－1号墳出土の埴輪（3）



K－1号墳出土の埴輪（4）

塩ノ久保遺跡

——一般県道磯部停車場線緊急地方道路整備A
(改良)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

発　行　日　平成3年3月25日
編集・発行　安中市教育委員会
群馬県安中市安中1丁目23－13
印　　刷　上毛新聞社出版局